

公衆衛生看護学実習に取り組む効果的な教育方法の文献検討

A literature review of effective teaching methods for public health nursing practice

笹木 佳子 齋藤 公彦 長野 扶佐美

Yoshiko Sasaki Tomohiko Saito Fusami Nagano

要旨

本研究では、公衆衛生看護学実習に関連した研究や報告から、公衆衛生看護学実習に関連した教員の役割を明らかにすることにより、公衆衛生看護学実習、関連科目の講義及び演習における効果的な教育方法の示唆を得ることを目的とした。国内で発表された文献のうち、医学中央雑誌 Web 版 (Ver.6) を用いて「公衆衛生看護学実習」、「教員」をキーワードに検索を行い、文献 8 件が分析対象となった。文献に記述された教員の役割に着目した結果、効果的な学習体験の必要性や、実習指導者・住民との協働に関する内容が報告されていた。学内での講義・演習時に、実習を連動できるように体験的に学べる機会の工夫が必要であること、また、様々な体験をするためには、実習指導者や住民との協働をすることが必要であることが示唆された。

Abstract

The purpose of this study was to clarify the role of faculty members in public health nursing practice from research and reports related to public health nursing practice, and to obtain suggestions for effective teaching methods in public health nursing practice, lectures, and exercises in related subjects. Among the literature published in Japan, we searched for "public health nursing practice", "faculty" using the web version of the Central Journal of Medicine (Ver. 6), and 8 documents were analyzed. As a result of focusing on the role of faculty members described in the literature, the need for effective learning experiences and the content related to collaboration with practical training instructors and residents were reported. It was suggested that it is necessary to devise opportunities for experiential learning so that practical training can be linked during lectures and seminars on campus, and that it is necessary to collaborate with practical instructors and residents in order to have various experiences.

キーワード：公衆衛生看護学実習，教員，役割

Key Words : public health nursing practice, faculty, role

I. 緒言

2020年10月1日に、より質の高い保健師の養成を目指し、保健師助産師看護師指定養成所指定規則の一部を改正する省令が公布され、施行されている。その内容として、保健師の役割と専門性をより明確化する観点から、単位数の総計が28単位から31単位と大幅に増加した¹⁾。

その理由として、昨今の災害の多発、児童虐待の増加の中、疫学データ及び保健統計等を用いて地域をアセスメントし、健康課題を有する対象への継続的な支援と社会資源の活用等を実践する能力の強化を求められていること、また、施策化能力を強化するため、政策形成過程について事例を用いた演習等の充実を図るため²⁾単位が増加した。

公衆衛生看護学実習では、看護の対象が複雑化しており、公衆衛生看護学教育モデル・コア・カリキュラム保健師教育におけるミニマム・リクワイアメントで示された4つの対象：地域社会での最小単位としての個人/家族、生活基盤としての地区/小地域、地域の住民組織/地域組織、地域の制度や仕組みを構築する機能を持つ組織（自治体・産業・学校）を系統的に理解できていることが暫定である³⁾。

また、公衆衛生看護学実習においては、数少ない直接的看護経験や保健師活動の見学・観察の機会を捉え、看護現象からその本質・理論へと学生の思考を発展させるには意図的な方略や働きかけが必要である⁴⁾。

看護を学ぶ学生にとって、看護師は会う機会のある身近な存在であるが、保健師については、一般的に出会うことや、その仕事を知る機会はほとんどなく、活動が見えづらい⁵⁾。

さらに、公衆衛生看護学実習における教員の指導体制は巡回型である場合が多く、学生に密にかかわり合う時間は少ないために、教

材化は高度な技術を要する⁶⁾。

したがって、保健師活動は多様であるため、学生が実習において学んだことを統合し、意味づけるためには、教育方法を改善し実習前後の講義・演習を強化する必要がある。

そこで、本研究は、公衆衛生看護学実習に関連した研究や報告から、公衆衛生看護学実習に関連した教員の役割を明らかにすることにより、公衆衛生看護学実習、関連科目の講義及び演習における効果的な教育方法の示唆を得ることを目的とする。

II. 研究方法

1. 文献検索方法

2013年から2023年の間に国内で発表された文献のうち、医学中央雑誌 Web 版(Ver.6)を用いて「公衆衛生看護学実習」and「教員」をキーワードに原著論文で検索を行った。検索の結果、12件の文献が抽出された。

これらの文献から、2013年～2023年の間に発表されたもの、また、コロナ禍による公衆衛生看護学実習の研究、健康教育の項目のみに関する文献を除いた結果、文献8件を分析対象とした。

2. 倫理的配慮

著作権を侵害しないこと、意味内容を損なわないように努めた。文献の出典がわかるように明記した。

III. 結果

1. 対象文献の概要

対象文献の概要を表1に示した。対象となった文献は8件であった。8件の内訳は、学生への自記式質問紙法によるアンケートの結果が4件、保健師への面接1件、アンケートが1件、記録から1件、文献検討が1件であった。

表1.文献の概要

番号	著者名 年	目的	対象	方法	結果
1	時田他 2023	看護師課程で必修とされている地域看護関連の実習の成果を明らかにし、看護基礎教育における地域看護学実習のあり方について示唆を得る	地域看護系実習について 実際の内容や 成果や課題が 記述されている文献	文献検討	1) 学生にとっての成果や意義、2) 教員にとっての成果や意義、 3) 住民を含む関係者への効果や意義、4) 今後の課題が記述されていた。 実習受け入れが保健師等関係者にとっても効果や意義があることを、実習の受け入れ交渉や打合せ時に伝え、実際の実習を通して効果や意義を実感できるような工夫が必要である。継続的な関わりは住民からも求められており、実習のみならず、実習外でも地域とのつながりを継続する必要性は高く、大学として方法を検討していく必要がある。
2	吹野他 2022	看護学生が保健師の職業選択を強化した要因を明らかにする	勤務経験3年までの 保健師8名	半構造化 面接	【周囲からの支え】【住民の日常に関わりたい】【地域の多様性】【理想像の具現化】【保健師の奥深さ】【環境全体を統合してみる力】【保健師の関係づくりの姿勢】【住民も保健師も生き生き】の8つの島に集約された。 予防活動等で日常生活に関わりたいという気持ちの芽生えにより保健師への関心が高まり、仕事の奥深さを感じることで理想となる保健師との出会い、住民が生き生きしている姿を感じることで職業選択が強化されており、効果的な実習体験を準備する必要がある。 教員の支えによる影響も大きく、教員が学生に親身に肯定的な声掛けを積極的に行っていくことも必要である。 保健師が住民とやりとりする場への参加や、保健師から具体的な活動等の誇りを聞く機会を実習に組み入れてもらうなど、環境を意図的に作り上げる必要があり、保健師養成課程での教員、実習指導者の役割が重要となる。
3	檜橋他 2021	公衆衛生看護学実習の前後で保健師の技術項目に対する学生の自己評価を比較し実習効果を検証する	A大学の保健師課程で 公衆衛生看護学実習を 履修した4年生15名	質問紙 調査	実習後の自己評価の平均値は、個人/家族に対する技術は48項目中31項目(64.6%)で有意に上昇し、集団/地域に対する技術は71項目中43項目(60.6%)で優位に上昇した。 実習後に平均値が大きく上昇した項目から、技術の実施体験の繰り返し、指導者や教員とのカンファレンス及び実習記録の積み重ねが重要である。到達割合が6割未満の項目から、潜在的な健康問題の把握、個別支援における相談や教育、健康危機管理に関する体験、地区活動の展開等の技術習得のためには、さらに意図的な学習体験の必要性が示唆された。
4	磯村他 2020	公衆衛生看護学実習による学習効果と課題を明らかにする	公衆衛生看護学実習を 履修した A大学4年次の学生161名	質問紙 調査	「公衆衛生看護学実習で学んだことは今後の看護実践に役立つ」の分析結果、「対象者の生活を考えられる」「地域との連携を学ぶ」「地域を知る」「保健師の技を学ぶ」の4カテゴリーが生成された。 学生は実習で、「対象者の生活を考えられる」「地域との連携を学ぶ」「地域を知る」ことが出来、患者の退院後の地域生活に目を向けた看護実践が具体化されたことが示唆される。 学習到達度の低い項目では、「保健師が行う看護研究の実際を理解する」64.71%と低かった。到達度を上げるための方策としては、まず教員が、保健師が行っている研究実施の状況や研究遂行における課題を把握する必要がある。保健師の行う実践研究に大学教員が関わることで、大学教育の質を高める取り組みへ発展できると考えられた。
5	萩原他 2019	A看護大学の公衆衛生看護学の教育手法に関する検討	A看護大学の保健師課程を 選択した4年次生53名	質問紙 調査	到達割合が70%に達しなかった項目は実践能力「Ⅲ.健康危機管理能力」であった。 グループテーマの報告書の作成により、学生同士のグループダイナミクスの促進や教員・指導者との積極的な関わりについて学生に大きな影響を与えていることが示唆された。 今後、学内での教育内容や方法を検討し、保健師教育の充実を更に図る必要がある。 「実習最終報告会は私にとって刺激的なかいであった」項目の中央値が高いことは、学びのフィードバックが受けられる機会としての実習最終報告会が学生同士の学び合いができ、実際に指導にあたった実習指導者・教員から学生が最終的な学びの総括を受ける場として、大きな影響を与えていると考えられる。

表1.文献の概要(続き)

番号	著者名 年	目的	対象	方法	結果
6	表他 2019	市町村の公衆衛生看護学実習における技術項目の体験が実習体制や実習終了時の到達割合と関係する かについて明らかにする	全国704市町村区の 実習指導者	質問紙 調査	養成所の教員と連携がよく行えていることは、「健康診査/見学後主体的に実施」と有意に関連した。家庭訪問/1例以上の継続訪問(25.2%)見学後に主体的な実施の健康診査(14.5%)、健康相談(11.3%)、事例検討(10.5%)が低い項目であった。 体験割合を高めるには、実習日数の延伸、市区町村保健師と教員の連携の強化、実習中の教員の指導の充実が重要である。 実習指導に携わる保健師と実習前から実習後までの学生の学修課程と教育目標を共有し、共に実習計画を立てるなどの細やかな連携と協働体制が不可欠である。養成所の教員が、実習以外の場面で日頃から現任教育や実践活動の評価などに協力を行うことによって、相互の信頼関係が深まり、協働体制が作られ、実習における体験割合の増加と充実につながると考える。
7	板垣他 2017	選択制における保健師教育の実習体験評価に関する先行研究との比較から、 統合カリキュラムにおける保健師教育の成果を評価するための基礎資料を作る	健康教育支援論実習を終了したD大学4年生96名 及び編入生6名	経験録 から 抽出	有意差の低い体験項目は、「訪問での体験」「問診体験」「関連機関見学」であった。 「訪問での体験」「問診体験」が5割未満について、実習指導者と教員が協議し、実習の準備及び指導を行う。
8	入野他 2015	「地域の健康課題を見出し、解決に向けて住民と協働する力を養う」 公衆衛生看護学実習の実現に向けた実習体制づくりの体系的な実施に寄与するべく実習体制づくりのプロセスを分析し、 構成要素の関連性を整理するとともに、その特徴を明らかにする	公衆衛生看護学実習に関する 教員と実習関係者との 実習協議に関する記録	記録から 抽出	実習体制づくりにおいては、①住民と協働するために住民へ近接していく段階的な手続き、②協議先の多様性と、協議に至るまでの時間の必要性、③実習内容と方法に関する実習受け入れ側との多層的協議・決定の3点の特徴を配慮する必要性が考えられた。 住民と協働する実習をかなえるためには、教育側が段階的に住民に近接しながら実習体制づくりを行うことが必要である。

2. 分析結果

文献に記述された教員の役割に着目した結果、効果的な学習体験の必要性、実習指導者・住民との協働に関する内容があった。

1) 効果的な学習体験の必要性

檜橋⁷⁾が、「保健師の技術項目と卒業時の到達度」71項目で調査した結果、実習後に平均値が大きく上昇した項目から、技術の実施体験の繰り返しが重要であること、到達割合が6割未満の項目から、相談や教育等の技術習得のためには、意図的な学習体験の必要性を報告している。

吹野⁸⁾は、実習体験から、予防活動等で日常生活に関わりたいという気持ちの芽生えにより保健師への関心が高まり、仕事の奥深さを感じることや理想となる保健師との出会い、住民が生き生きしている姿を感じることで職

業選択が強化されており、効果的な実習体験を準備する必要があると述べている。

また、磯村⁹⁾は、実習体験から、「対象者の生活を考えられる」「地域との連携を学ぶ」「地域を知る」ことが出来、患者の退院後の地域生活に目を向けた看護実践が具体化されたことを明らかとしている。

吹野¹⁰⁾は、実習での保健師の話やその他の実習体験から得た学びを、日々学生同士で語り、振り返る場を設けること、学内で現場の保健師の話聞く体験、保健師像を伝える教員自身も、学生との関わりの中でいきいきとしている姿を見せることが、学生の頑張る気持ちと、保健師志向の支えにつながると述べている。

さらに萩原¹¹⁾は、グループテーマの報告書の作成により、学生同士のグループダイナミ

クスの促進や教員・指導者との積極的な関わりについて学生に大きな影響を与えていること、教員の支えによる影響も大きく、教員が学生に親身に肯定的な声掛けを積極的に行っていくことも必要であると述べている。

2) 実習指導者・住民との協働

実習指導者との協働では、時田¹²⁾は、実習受け入れが保健師等関係者にとっても効果や意義があることを、実習の受け入れ交渉や打合せ時に伝え、実際の実習を通して効果や意義を実感できるような工夫が必要であると述べている。

表¹³⁾は、実習指導に携わる保健師と実習前から実習後までの学生の学修課程と教育目標を共有し、共に実習計画を立てるなどの細やかな連携と協働体制が不可欠であると述べている。

檜橋¹⁴⁾は、実習後に平均値が大きく上昇した項目から、指導者や教員とのカンファレンス及び実習記録の積み重ねが重要である、また、板垣¹⁵⁾は、訪問や問診の低い体験項目について、実習指導者と教員が協議し、実習の準備及び指導を行うことが必要と報告している。

また、吹野¹⁶⁾は、公衆衛生看護学実習の中で保健師にインタビューを行える場などが効果的と述べている。

さらに、磯村¹⁷⁾は、学習到達度が低かった看護研究の項目より、まず教員が、保健師が行っている研究実施の状況や課題を把握し、実践研究に関わることで、教育の質を高める取り組みへ発展できると報告している。

住民との協働では、時田¹⁸⁾は、継続的な関わりは住民からも求められており、実習のみならず、実習外でも地域とのつながりを継続する必要性は高いと述べている。

また、入野¹⁹⁾は、住民と協働する実習をか

なえるためには、教育側が段階的に住民に近接しながら実習体制づくりを行うことが必要であると報告している。

IV. 考察

1. 効果的な体験の必要性

結果より、技術体験の繰り返しの必要性や保健師志向を促進させるような体験やロールモデルの提示が必要であることが明らかとなった。

中田²⁰⁾は、基礎教育の課題にある基本を中心に対象に応じて柔軟に適用できる考え方や方法について、ロールプレイや事例検討を通して考え、学びを深める具体的な体験学習の積み重ねが重要であると述べている。

表²¹⁾は、演習と実習を連動させることにより、実習では主体的な体験を中心とすることが可能となり、これらの対応が日数の課題、体験割合が低い項目が複数あるといった現状を補える可能性が示唆されている。

これらの事より、潜在的な健康問題の把握、個別支援における相談や教育、健康危機管理に関する体験、地区活動の展開等の技術習得をするためには、学内での講義・演習時、実習を連動できるように、体験的に学べる機会の工夫が必要であると考えられた。

そのため、文部科学省が推奨しているアクティブラーニングの学習方法²²⁾に沿って、体験的に学べる機会の工夫をすることにより、地域をアセスメントし、健康課題を有する対象への継続的な支援と社会資源の活用等の実践能力を強化できると考えられる。

2. 実習指導者・住民との協働

結果より、様々な体験をするためには、実習指導者や住民との協働をすることが必要であることが明らかとなった。

麻原ら²³⁾は、協働には、互いの専門性を認

め合い、互いの意見を尊重し、信頼し合い、互いに役割を明確にしてそれぞれの力を活かせるような関係性が必要であると述べている。

表²⁴⁾は、実習指導に携わる保健師と実習前から実習後までの学生の学修課程と教育目標を共有し、共に実習計画を立てるなどの細やかな連携と協働体制が不可欠であると述べている。

時田²⁵⁾は実習を通して、住民ニーズも満たされ、学生の看護実践能力も習得され、これらが大学による地域貢献につながると述べている。

実習以外の場面で、日頃から実習指導者が住民に対し、協力をを行うことにより、相互の信頼関係が深まり、協働体制が作られ、実習における体験割合の増加と充実につながると考えられた。

したがって、学生が様々な体験をするためには、教員が、実習指導者や住民との協働をすることが必要であると考えられた。

学生が小地域を担当し地域に出向く体験をすることで、住民との協働を体験できる絶好の機会になる。

住民との協働を体験することにより、情報収集、分析、解決策の検討をすることができ、政策形成能力の学習へとつなげることができると考えられた。

V. 結語

1. 学内での講義・演習時、実習を連動できるように、体験的に学べる機会の工夫が必要である。

2. 学生が様々な体験をするためには、実習指導者や住民との協働をすることが必要である。

利益相反

本論文に関して、開示すべき利益相反関連事項はない。

文献

- 1)厚生労働省, 保健師助産師看護師学校養成所指定規則の一部を改正する省令の公布について(通知), 令和2年文部科学省・厚生労働省令第3号, 2020年10月30日, <https://www.mhlw.go.jp/web/t_doc?dataId=00tc5425&dataType=1&pageNo=1>, (閲覧日. 2023.11.24).
- 2)厚生労働省, 看護基礎教育検討会報告書の概要, 2019年10月15日, <<https://www.mhlw.go.jp/content/10805000/000557242.pdf>>, (閲覧日. 2023.12.27).
- 3)全国保健師教育機関協議会保健師教育検討委員会, 公衆衛生看護学教育モデル・コア・カリキュラム保健師教育におけるミニマム・リクワイアメンツ, 2018年3月, <<https://www.core-curriculum-2017-houkoku-2.pdf>>, (閲覧日. 2023.11.24).
- 4)野村美千江(2018), 実習指導の原理－公衆衛生看護学実習が授業として成立するために－, 保健師教育, 2(1), 10-18.
- 5)吹野信浩, 松浦治代, 金田由紀子(2022), 看護学生が保健師の職業選択を強化した要因, 日本公衆衛生看護学会誌, 11(3), 163-171.
- 6)牧内忍, 仲間紀子, 川崎道子(2009), 地域保健看護実習における学生の健康教育の改善-学生と指導保健師の評価得点の比較-, 沖縄県立看護大学紀要, 10, 55-61.
- 7)檜橋明子, 中村美穂子, 小野順子, 山下清香, 手島聖子, 尾形由起子(2021), 保健師の実践能力に対する公衆衛生看護学実習の効果－学生の自己評価に着目して－, 福岡県立大学看護学研究紀要 18, 27-35.
- 8)吹野信浩, 松浦治代, 金田由紀子, 前掲書 5), 163-171.
- 9)磯村聡子, 守田孝恵, 齋藤美矢子, 木嶋彩乃

(2020), 公衆衛生看護学実習による学習効果と課題, 山口医学, 69(1), 57-66.

10) 吹野信浩, 松浦治代, 金田由紀子, 前掲書 5), 163 - 171.

11) 萩原智代, 南部泰士(2019), A 看護大学公衆衛生看護学実習における実習前後の調査からみた教育効果の検討-「保健師教育に求められる実践能力と卒業時の到達目標と到達度」を用いた学生の自己評価からの考察-, 日本農村医学会雑誌, 68(1), 31 - 44.

12) 時田礼子, 岸田るみ(2023), 看護学士課程における地域看護学実習に関する文献検討, 東京情報大学研究論文集, 26(2), 49 - 56.

13) 表志津子, 岸恵美子, 吉岡幸子, 成瀬昂, 糸井和佳, 望月由紀子, 坂本美佐子, 土屋文枝, 五十嵐千代(2019), 市町村の公衆衛生看護学実習における技術体験と指導体制, 実習終了時の到達度との関連, 保健師教育, 3(1), 72-82.

14) 楠橋明子, 中村美穂子, 小野順子, 山下清香, 手島聖子, 尾形由起子, 前掲書 7), 27 - 35.

15) 板垣昭代, 相原綾子, 会沢紀子, 塩澤百合子, 野尻由香(2017), 保健師・看護師統合カリキュラムにおける公衆衛生看護学実習の実習経験内容分析と課題, 獨協医科大学看護学部紀要, 11, 57 - 64.

16) 吹野信浩, 松浦治代, 金田由紀子, 前掲書 5), 163 - 171.

17) 磯村聡子, 守田孝恵, 齋藤美矢子, 木嶋彩乃, 前掲書 9), 57-66.

18) 時田礼子, 岸田るみ, 前掲書 12), 49 - 56.

19) 入野了士, 窪田志穂, 田中美延里, 八束育子, 松下久美子, 篠原万喜枝, 野村美千江(2015), 住民と協働する力を養う公衆衛生看護学実習を実現するための実習体制づくりのプロセス, 愛媛県立医療技術大学紀要, 12(1), 15-21.

20) 中田涼子, 井上清美, 奥野久美子(2017), 新任期に実感する統合カリキュラムにおける保健師基礎教育の課題～選択制教育のあり方を考える～, 神戸常盤大学紀要, 10, 115-122.

21) 表志津子, 岸恵美子, 吉岡幸子, 成瀬昂, 糸井和

佳, 望月由紀子, 坂本美佐子, 土屋文枝, 五十嵐千代, 前掲書 13), 72-82.

22) 文部科学省, 新たな未来を築くための大学教育の質転換に向けて～生涯学び続け, 主体的に考える力を育成する大学へ～ (答申), 平成 24 年 8 月 2 8 日, (<http://www.mext.go.to/component/b-menu/shingi/toushin/-_Files/afieldfile/2012/10/04/1325048-1.pdf>), (閲覧日, 2023.11.26).

23) 麻原きよみ, 佐伯和子, 岡本玲子, 荒木田美香子(2019), 公衆衛生看護学原論, 医歯薬出版株式会社, 東京, 78-79.

24) 表志津子, 岸恵美子, 吉岡幸子, 成瀬昂, 糸井和佳, 望月由紀子, 坂本美佐子, 土屋文枝, 五十嵐千代, 前掲書 13), 72-82.

25) 時田礼子, 岸田るみ, 前掲書 12), 49 - 56.